



生物の活性が向上するとは？

量子水による生物の活性を研究しています。

1. きのこの培養実験:使用する水による成長比較

きのこの培養に欠かせない「水」の種類による

a イオン交換水

<

b ナノバブル水

<

C 量子水の比較試験

タモギタケ菌体重量(mg)	a. 210mg	b. 235mg	c. 298mg
タモギタケ菌そう直径(cm)	a. 4.9cm	b. 6.4cm	c. 8.4cm

生育したきのこの大きさ(直径、重量)は $a < b < c$ となっています。

※ナノバブル水は酸素等をバブリングにより充填した量子水の機能に類似の水です。

2. ATP合成量の比較

こちらは、きのこの培養実験の結果を受けて、さらにミトコンドリアのATP合成を比較したものです。

a イオン交換水

b 量子水

タモギタケ菌体重量(mg)	a. 205mg	b. 360mg
ATP合成量(RUL)	a. 9,802	b. 52,819

A T P (活動エネルギー) 合成が向上することは、同じ栄養状態でも量子水の摂取によりより効率的にエネルギーを生み出すことができる。または、加齢にともなう生産能力の低下を抑え生体の恒常性に役立つ可能性を示唆すると考えています。

食事から摂る栄養やそれを補うサプリメントも大切ですが、それ以前に、呼吸や活動エネルギー合成といったわたしたちのからだのメカニズムの根本にかかわる「水」の機能性に着目することも重要と考えています。(特許取得済)